

令和5年度 教員養成フラッグシップ大学フォローアップ実地調査報告書

教員養成フラッグシップ大学推進委員会

大学名	東京学芸大学	調査日	令和5年11月30日(木)
調査委員	秋田 喜代美 委員(主査)、山口 宏樹 委員(主査代理)、北神 正行 委員(大学担当)、白水 始 委員、高橋 純 委員、木村 国広 委員、若江 眞紀 委員		

大学関係者(責任者)からの説明

(取組の進捗状況)

- ・フラッグシップ大学で目指すテーマは、子供と教師が新たな社会を創造していく学校教育の実現である。対子供の観点から、予測困難な時代へ対応できる力と新たな価値を創造することができる力を育成できる教師、教師自身の観点から、学校や社会をより良くすることに自立的・主体的に取り組むことができる力を有する教師を目指す人材像とし、伸ばす資質・能力を、教科横断学習実践力やアクティブラーニング実践力、マネジメント力など明らかにしている。
- ・令和5年度には改組によるカリキュラム改訂を行っている。
- ・令和5年度新生より、自律型カリキュラムデザインを導入しており、目標を明確にし、必要な知識を身に付け、経験を積むカリキュラム作成を可能としている。これにより、学生の目的意識を明確にし、個別最適で学生の主体性・自律性を成長させるカリキュラムが実現。
- ・令和4年度に設置された先端教育人材育成推進機構を中心とした推進体制となっている。

教職員との意見交換

- 特例5科目は、全体として教育創生科目として構成している。
- カリキュラムマップが煩雑で全体像を把握するのに時間がかかるため、教育創生科目の科目全体が把握できるような資料があると良い。
- 教育創生科目の新設科目は大学が独自に指定している科目で課程認定を受けている(資料2-4)。
- 自己決定・自己選択に重きを置いている点、各論から総論への学びの流れ、自己創造の体験から理論へ、というこれらの全体の構造がうまく機能するのかがポイント。
- 特例5科目の相互関係について、現状はまだ不十分であり検討途上。
- 学生のなりたい教師像が非常に狭い。大学から教員像を見せていく工夫など、多様な情報の提供が必要。
- 自律型カリキュラムでは、別コースの学生とのかかわりを持たせることによって、多様な学生が学びあい、詳しい学生が教えあうような関係性ができ、学校現場の学びあう、協働学修の姿を実現できると考えられる。
- 各論から総論へと続く流れについて、時間割の都合がつけば各論に戻れる仕組みになっている。

- 特例科目の開設に伴い、教育実習や体験活動の実施方法も変化していくべきであり、学校への働き掛けも重要であり、学校現場や教育委員会とはカリキュラムを構想する前から連携しており、地域の状況、情報は入るようにされている。
- 選択必修の科目を担当する教員にはFDを実施し、資質を見に付けるためにどのように授業を変化させていくかなどのビジョンの共有を共有している。

連携先機関の担当者との意見交換 上越教育大学、玉川大学

- 両大学とも自大学のカリキュラムを踏まえ検討している段階。科目開発には関わっていない。
- 科目の提供方法については、履修科目のバッティングの無い集中講義でオンライン形式を希望する。
- 連携先機関での検討組織の立ち上げ状況について、上越教育大では担当副学長を中心に担当課職員が検討し、玉川大では学内のセンターを中心に検討している。
- 研究をベースに科目は常にブラッシュアップしていく。常に進化する科目・コンテンツを取り入れるには学内での理解が重要になる。
- フラッグシップ大学としての東京学芸大には、他大学でも対応できるよう汎用性を持たせたモデルとなることが期待される。

学生との意見交換 (○：委員、■：学生)

- 入学前と入学後で大学のイメージに変化はあったか。
- 教科を学ぶより子どもとのかかわりを持ちたいと考え入学した。入学前は、やりたいことを絞らなければならぬと思っていたが、横断的に学べるカリキュラム構成であったため自分に合っていると感じた。
- 入学前と比べ意識が変わった点と変わったきっかけがあれば。
- カリキュラムを考えていくうえで、自分のやりたいことについて向き合うきっかけができ、可視化することによってやりたいことを言語化できるようになった。
- 10年後の学校はどう変化していくか考えたことはあるか。
- 学び方の多様化。ICTの活用が増える。外国人生徒の増加。
- 自律型カリキュラムは自らが描く教師像を見据えて構成をしていくこととなるが、カリキュラムマップについてはすぐに理解することができたか。
- わからない部分が多かったが、入門セミナーで詳しく説明があったため理解することができた。
- 自己決定型に関してマイナスイメージはなかったか。
- ・選択する量が多く大変だが、自分に合った科目を選択できる点が非常に魅力的。
 - ・自分の目指す教師像をイメージしながらカリキュラムを選択できるため、自分自身を見つめ直すきっかけとなり、そこから気付きも生まれたことは非常に良かった。

附属学校の授業・施設等の見学及び附属学校教員との意見交換

- 新科目を履修している学生たちの教育実習の受入について、附属教員を含めた部会で検討し見直しを図る必要がある。
- 大学がカリキュラムを見直している中、実習も先導的先進的であることが望まれる。実習でのDX化は不可欠であり、Webを活用した授業は必ず一回はすることを検討すべき。
- フラッグシップ科目と教育実習については連続性を持たせる必要がある。フラッグシップ大学同士で教育実習力の形成を柱として取り組めると良いのではないかな。
- 附属での教育実習の指導力を担保するための取組として、他の附属学校園と連携した力量形成を図る取組や教師の自主的な研修の仕組み作りを検討されている。

大学関係者（責任者）との意見交換

- 自律型カリキュラムや科目開発の仕組みに関して、学生の話から1年目から機能していることがわかった。今後はカリキュラムの変化に併せて教育実習の在り方も変化させていく必要があるため、附属学校と連携し連続性を持たせた実習をお願いしたい。
- 学生が経験したことや身についたことを単に情報交換するだけでなく、3・4年次時点で卒論に匹敵するようなビッグプロジェクトに取り組みせるような機会があればより良くなるのではないかな。
- 科目のスリム化を図り専門科目を減らし、開設単位の上限を設けて、例外は申請に基づき実施とした。1単位にしたことにより、科目を組み合わせる方向に向かっているため、カリキュラムオーバーロードの仕組みは機能している。
- 先端型の教職大学院への移行を検討しており、ハイレベルな実習にチャレンジしていく。
- フラッグシップ科目を学んだ学生が将来現場へ出ていくことを見越し、学校現場への説明が非常に重要になる。
- 他大学の参考例として、特例科目だけではなく、組織がどのようにカリキュラム全体の開発を行い、変革していったのかということを発信し、連携大学に共有してほしい。
- 特例科目を他大学のカリキュラムへ取り込むことは現状の制度では難しいため、普及の仕組みに関して検討する必要がある。